

鎌倉末期に山陽道で 花開いた刀匠備後三原派

正家〔備後國〕

備前から備後にかけて、古くから赤目砂鉄が豊富なこともあり、奈良時代の天平の頃になると、初代正家が、備後国尾道に住んで刀鍛冶を始めました。鎌倉初期になると、尾道市の北にある甲山町は、高野山の備後国の莊園「大田莊」となり、そこに、大和国から刀鍛冶が移住して来ました。

よって、備後国の作刀技術は、備前、備中鍛冶の影響を受けず、大和伝を踏襲しています。鎌倉末期、六代正家は、住居を尾道、鍛冶屋敷を赤目砂鉄の産地で名高い山陽道の三原に構え、備後鍛冶として三原派を興しました。

刀匠の世界で、三原正家として名を馳せた作風は、「鎚高に反ありて、地鐵は柱目に刃文は元を小亂に先は廣直に足を入れて沸多し、切先は延ひたる方にて帽子丸し」と言われ、また、備後三原派の特徴としては、「刀の造、鎚高く反ありて、地鐵は柱目多し白く風あり、刃文は直刃も小五目に逆足の交りたるもあり、忠は棟角に横鑢あり」と伝えられています。

なお、在銘品が少ないのは、当初、莊園の僧兵の御抱え鍛冶として、刀を納めていた経緯があるためです。

時代によって三原派は、古三原（鎌倉末期〜南北朝）中三原（室町前期）末三原（室町後期）と呼称が変わり、全盛期は約三百年に及びます。

六代正家の長男七代正廣の兄弟や、子孫、弟子たちによって、中三原の中に木梨三原、法華三原、辰房三原（尾道辰房）、鞆三原、末三原の中に其阿彌、五阿彌、貝三原の流派も誕生しました。

備後三原派の作品には、古三原の「御物」正家（六代正家）作、「浅野家伝来／金象嵌銘／大三原」「国の重要文化財」、「毛抜形太刀」〔国の重要文化財〕正光作、「伊達家伝来／金象嵌銘／正家」〔国の重要美術品〕、「金象嵌銘／正家磨上光徳（花押）」〔国の重要美術品〕等があります。

中三原では、法華一乗として世に知られた一乗（法華三原）や、最上大業物と呼ばれた応永の正家（左兵衛尉）が名を残し、末三原においては、「毛抜形太刀」長行（五阿彌）作が国の重要文化財に指定され、正家、正近（各後代末三原）、感行（其阿彌）、正興（貝三原）などの実力刀匠が作品を残しています。

現在、三原市系崎町にある六代正家が使用した井戸や、鍛冶屋敷跡によって往古を忍ぶことが出来ますが、明治新政府の「廢刀令」により、三原派は終焉を迎えました。

正家

二十八代宗家

其阿彌秀文



太刀銘 正家 六代正家作

平成十六年（二〇〇四年）四月十五日
この話は、史実をもとにした物語です。
諸説は多々ありますが、御了承下さい。

宗家の許可なく無断複写・転載を禁ず。

文化庁登録 第一九七九八号